

第8回 校長会議あいさつ

R.6.10.23 稲垣

朝夕の引き締まった空気に秋の深まりが窺われます。四季は日本の宝物の一つだと思います。この季節がしばらく持ちこたえてくれることを心から望むところです。教育関係の行事はいよいよ佳境です。市教研一斉授業研究会を終えて、明日には市教委が研究委嘱した三校の発表会も予定されています。市内全校の研修の機会として、活発な交流を行い充実させていただきたいと思います。

本日は二点お話します。

一点目は、コロナ禍のその後についてです。コロナが明けて一年半が過ぎようとしています。コロナ禍のダメージにより、方針転換を余儀なくされた産業もあるようです。学校においても、未だにコロナ禍以前に回復し切れていない部分が残っています。コロナ対策時に提唱された「三密回避」は、学校教育に大きな後退を招いたと捉えています。本来、集団生活による教育効果は、子どもたち同士、あるいは子どもたちとその周囲の大人たちとの関係が親密であるほど向上するものです。また、集団内の豊かなコミュニケーションは、所属意識を醸成し、安心感にもつながりますが、コロナ禍ではそれが希薄化してしまいました。そしてコロナ後に、不登校が増加した一因ともなっていました。

おりしも学校では、働き方改革の推進という課題も担っており、コロナ対策を機会に教育活動全体の見直しにも取り組みました。業務の精選や能率化は進みましたが、一方で三密回避により縮減せざるを得なかった教育活動の回復に少し遅れが生じています。

例えば、授業中の活発な話し合い活動には、一定の熟練した指導力を要しますが、長年授業研究に尽力してきた本市の学校では、児童生徒が生き生きと話し合う授業をしばしば目にすることがありました。しかしながらコロナ禍での一斉教授型の授業の推奨により、この教師力の向上は、停滞せざるを得ませんでした。また、給食指導についても、黙食こそなくなりましたが、未だに講義隊形で全員前を向いて食べている学級が残っているようです。和やかな食卓を囲むことによって得られる人間関係の構築は、食育の大切な価値の一つです。これに鑑みるならば、子どもたちが皆で協力して配膳し、食べる時は向かい合わせで、できるならテーブルクロスや花も備えた食卓が望ましいのです。学級経営に

おける給食の最大の価値は、子どもたちが、能力差などに関係なく、その時間の悲喜こもごもを共有して仲良くなれることです。「同じ釜の飯を食う(食べさせる)」意義を再確認したいと思います。

二点目は、次期学習指導要領についてです。過日の新聞報道に、中央教育審議会での検討を前に、有識者によるシンポジウムが開催された記事がありました。その発言の中で、印象的なものをピックアップしてみますと、「現行学習指導要領は、内容を詰め込み過ぎで、カリキュラム・オーバーロード」という指摘や、「指導要領の改訂は、個別の利害や短期的な流行に振り回されるべきではない」といった、強く共感を覚える知見がありました。また、入試との関連性から「指導要領の周りにはいろいろな装置があり、それも含めて考えるべき」という指摘もありましたが、これは、部活動の地域移行の着地点にも大きく影響することを示唆するものと捉えられます。さらには、「(昨今の教育)改革の理念はよいが、条件整備が追いついていない。内容の高度化は、教員の増員と一緒に議論する必要がある」という、思わず膝を打つ見解も述べられていました。働き方改革とともに、給与アップなど、教員の待遇改善も進みそうですが、それらをもって今の学校現場の窮状が改善されるものかどうか心配は尽きません。「子どもは国の宝」と、しばしば言われますが、それを実践するためには、大人である私たち皆が強い意志をもって、学校教育はもちろん、家庭や地域の教育力をはじめ、社会全体の教育力を押し上げていく機運が不可欠ではないかと感じています。